

『夜の寢覚』における女君の人物造型

—〈卑しい身分の女〉としての女君—

岸本悠子

はじめに

従来、『夜の寢覚』は、精神面、また処世面において、女君が成長する物語として指摘される傾向にあった。第一部においては「宿命にもてあそばされる、全く無気力な、消極的人物として描かれ」ると指摘され、以降に関しては、「女君の心は物語が進むにつれて成長しつつ」、「故闘白の若き未亡人として再登場してからのこの人は、何事も自らの責任で処してゆこうとする「心強き」女に成長している」と指摘される。つまり、女君の成長、主題の深化といった、物語における変化に焦点をあて、『夜の寢覚』は論じられてきたが、女君の人物造型を考える時、その変化しない部分にも、もう少し注意を払ってもよいように思う。

先行研究で指摘されるように、『夜の寢覚』の女君は消極的で宿命にもあそばされる少女から中間欠巻部を経て、何事も自らの能力で対処できるように成長する人物である一方で、彼女をとりまく噂や誤解によって作り上げられる、〈虚像〉ともいえる女君像も存在することを提唱したい。

その一つとして、〈卑しい身分の女〉という側面に焦点をあてる。女君自身は太政大臣の娘であり、帝の后にも成り得る身分ではあるが、冒頭で但馬守三女と誤認され、又第三部においては女一宮と比較されるなど、現存物語を通して〈卑しい身分の女〉とみなされることが女君の性質の

一つとして一貫して描かれているのだ。

本稿では、従来さまざまな角度から指摘されてきた女君の実像とは異なる、作り上げられた〈虚像〉ともいえる女君の人物像の特徴と重要性について考えたい。

一 「下藤」の女としての女君—第一部の女君像—

男君と、女君の姉である大君が婚約した年は、女君にとって、大厄の年であった。女君は物忌のために訪れた九条の邸宅で、その夜来あわせた但馬守三女らと合奏する。

男君は折しもその邸宅の隣に位置する乳母の屋敷に見舞いに来ていゝる。そして、合奏の音色に引き寄せられ、隣の邸宅に侵入し、強引に女君と契りを結ぶ。この際、男君は逢瀬の相手を但馬守三女と誤認しており、かつて但馬守三女と恋愛の噂があった宮中将になりすます。この後、女君は男君にその正体を知られるまで但馬守三女として男君に認識される。

当時、権中納言の位にあった男君にとって、受領の娘である但馬守三女は身分の低い女であった。すでに、男君の身分意識については、指摘されている所ではあるが、ここで改めて、男君から九条で出会った女への視点を検討してみる。

男君は行頼に勧められ、竹の中から音色が聞こえてくる邸宅を垣間見する。三人の女性がそれぞれ演奏する様子が目に映るが、箏の琴の人を見ると「むら雲のなかより望月のさやかなる光を見つけたる心地」(巻一 二九)^④がする。この表現は、『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』(以下、『新全集』)の頭注に「中の君の比較を絶する美しさの強調」と指摘される通り、男君の美しさに対する驚嘆の心情を表したものと考えられる。男君はこの箏の琴の人を行頼から聞いていた但馬守三女であると判断し、次のように考える。

①「かたちは、やむごとなきにもよらぬわざぞかし。竹取の翁の家にかかぐや姫はありけれ」と見るにも、この程の様は、なほ、めずらかなり。(巻一 二九～三〇)

姿かたちというものは「やむごとなき」身分にはよらない、つまり、受領階級という決して高くはない身分には似つかわしくない美貌であると思ひ、さらに、この箏の琴の人を「かぐや姫」に、九条の邸宅を「竹取の翁の家」に喩え、身分の卑しさを強調している。

当該場面は諸注釈書によって『竹取物語』の影響が指摘されているが、かぐや姫に喩えられる女君の超人的な美しさとともに、「竹取の翁の家」という身分的には最下層の人物を比喩的に登場させることで、男君の身分意識、つまり箏の琴の人への侮蔑した心情が読み取れる。

この時点では、男君は箏の琴の人を但馬守三女であると誤認している。つまり、女君自身は知らないながらも、受領階級の娘としての視線を女君は受け、評価されているのである。

次の記事も男君の但馬守三女への評価がうかがえる場面である。

②「げにことわりなれど、直々しきあたり(傍線は稿者による。以下同様)に我まだきに知られじ。見では片時あるべくもあらぬを、おのづから、我がため、世の音聞き、見苦しくもどきなかるべきさまにてこ

『夜の寢覚』における女君の人物造型

そ」と、堪へぬ心を鎮めて、名のりもしたまはず。(巻一 三三)

男君は、①の場面で垣間見した後、箏の琴の人がいる邸宅に押し入り、強引に契りを結ぶ。帰る際に、「直々しきあたり」、つまり並々の身分の者に自分の名が知れては「世の音聞き」が悪く、外聞が憚られるとし、自らの名は伏せ、宮中將のふりをして帰って行く。

この際、男君は箏の琴の人を但馬守三女と認識しているが、実は女君である人物を「直々しき」身分の者とし、名を明かすに足る人間と認めない。

①の場面以降、男君は女君を但馬守三女と誤認しているので、但馬守三女の社会的評価を男君が下しているにすぎないとしても、実際に逢瀬を交わしたのも、名を隠されたのも、女君であり、男君は女君の姿、声、容姿を脳裡に描きながら、但馬守三女としての評価を女君に下している。このような男君の姿勢は、今後の展開にも影響する。

男君は逢瀬の相手を誤認したまま帰り、但馬守三女(実は女君)との今後関係の在り方について思いをめぐらす。もし男君が通っていると知れたら、但馬守三女側が男君との関係について「明け暮れ出だし入れて見つべからむ人にはなかなか劣」(巻一 三六)る、「思ひのほかに高き宿世」(巻一 三六)とし、身分差について騒ぎ立ることを心配し、対処方法を考える。

③「…死ぬばかりおほゆとも、なほしばし思ひ念じて、中宮に申して召し取らせたまつりて、宮仕ひさまにて見む。さだに出で離れなば、ほかに誘ひ出でなどして、また思ひ増すかたなき心のとまりにて、さる私物に忍びて見む。さては人の耳立つべきことにもあらず。采女を召す帝は、なくやはありける。これはまして、宮仕へ人を限りなくもてなし思はむ、咎にもあらず。さのみこそはあれ。ただ女にては、くだれる窓のうちに忍びて通はむこそ、いと見苦しかるべ

れ」と、おぼしなりぬ。

(巻一 三七)

③の記事に見えるように、結局男君は九条で出会った女と結婚することではなく、中宮付の女房として「思ひ増すかたなき」恋人にすることを決意する。そうすると「人の耳立つ」ことは避けられるというのである。九条で出会った女を采女に、自らを帝に喩え、自らを正当化した上で、相手の女を「ただ女」とし、その女が住む場所を「くだれる窓のうち」と評価して、「見苦し」さを避ける手段を見つける。

場面②、③において、男君が自分の低い女と恋愛すること、またその世間に知れることを「見苦し」と思う姿が描かれている。高橋由記氏は平安後期の摂関家嫡子の結婚の在り方を史実に基づいて検討された上で、「但馬守女との関係を公にしようとしなない男君の身分意識」が「大君との結婚以前の男君の積極的な行動を妨げ、事態を複雑にした」ことを指摘し、さらに

男君が但馬守女との結婚をあくまでも避けたのは、源太政大臣家の大君との結婚が決まっていたこともあるが、摂関家嫡子にとつては当然の決断だったといえよう。

と結論づけられている。確かに史実に照らしてみると「当然の決断」なのであろうが、女君の人物造型を考える時、男君の決断そのものとは別に、繰り返し物語の中で表現される男君の視線の在り方に注目すると、また異なる考え方もできる。

次の記事を確認しよう。

④「その品ならず、いとみじく優にうち見えさぶらひしが、さやうの下藨のよろしきがあまたさぶらふこそ、心にくくさぶらへ。召し出でさせたまへ」

(巻一 四〇)

男君は③に見える「見苦し」さを避けるための計画を実行に移し、中宮に但馬守三女を女房として召すことを勧める。男君が但馬守三女を紹

介する際に「下藨」の女房としている。④の場面に至って、女君は「下藨」の女房として扱われることになるのだ。

以上、検討してきた通り、物語冒頭の出会いの場面から誤解は続き、男君視点の但馬守三女の身分の低さに関する言及は多い。①では「やむごとなきにもよらぬ」、②では「直々しきあたり」、③では「ただ女」、④では「下藨」というように、男君の但馬守三女への評価の低さが繰り返し物語の中で表現されている。しかし実際男君が見て、関係を結んだのは女君であり、女君の様子を頭に思い浮かべ、但馬守三女への評価を下している。女君は男君の視線を通して「下藨」の女房とまで評価されるようになったのである。

その後、男君の計画は遂行され、中宮の女房として参内した但馬守三女を見て別人であることに気付く。但馬守三女を「思ひおしむる方さま」(巻一 六五)と見下していたからこそ、恋情も紛らわせたものを、と男君はさらに混乱する。但馬守三女は男君に女君の正体を明かした以降は物語中に描かれなくなり、男君の視線は女君自身へと注がれていく。

但馬守三女の物語中の役割は、男君の誤解が解かれるとともに終わる。女君自身が本来持っている性質、特徴だけでは付されるはずのなかったイメージを、男君の視線を通して女君は背負うことになり、また、但馬守三女として受けた被害によって女君は懐妊することになるのであるから、この意味においても、女君は誤解が解かれたあとにも「身分の低い女」としての運命を実質的に背負わされることになると考えられる。

以上の通り、第一部における、女君の〈卑しい身分の女〉としての側面を検討してきたが、これはあくまでも男君の誤解によるものであった。それでは、誤解が解けた後には、女君には〈卑しい身分の女〉として物語中において描かれることはなくなったのであろうか。第二章において検討する。

二 第三部への〈卑しい身分の女〉イメージの継承

第三部に次のような贈答がある。

① ひきそふる松見てもなほ思ふかな同じ尾の上に生ひぬ契りを

(卷三 二二二)

② ひきわかれふたばの松ははつねにも思ひ知りけることぞかなしき

(卷三 二二四)

①は、女君が秘密裏に石山で出産した姫君から、新年の挨拶として女君へと送られた和歌である。①に対して、女君が②の返歌をしている。

この贈答は、『源氏物語』初音巻の明石の君と姫君の贈答を踏まえるか^⑥と指摘される。初音巻では

年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ

(卷三 一四六)^⑦

と明石の君が娘に送り

ひきわかれ年は経れども鶯の巢だちし松の根を忘れめや

(卷三 一四六)

と明石姫君が返歌をしている。『夜の寢覚』では娘から、『源氏物語』では母からまず和歌が送られている点、さらに、石山の姫君の和歌は褒められ、明石の姫君の和歌は評価が低いことなどの相違点はあるものの、新年における母子の「松」をモチーフとした和歌の贈答という構図に關しては、『夜の寢覚』は『源氏物語』の当該場面を想起させるつもりで描いたものと考えられる。明石の君の人物像としては、

結局明石の君は、身の程意識から逃れることはできず、源氏の愛情でさえも自らの低い身の程を口実として捉えざるを得なかった、と。「わが宿世はいとたけくぞ」と明石の君が自らの宿世を捉え返せるのは、明石の君を苛んだ身の程意識のおかげなのである。^⑧

『夜の寢覚』における女君の人物造型

と説明される人であり、『夜の寢覚』の女君がこのような「身の程意識」に苛まれた明石の君によそえられていることは注目すべきである。『源氏物語』の明石一族と『夜の寢覚』の影響関係を指摘した坂本信道氏は、

受領にまで下がり下がっているが、大臣家の末裔であり、娘をかしずいている。「再び昔日の権勢を取り戻そうと、激しい願いに燃える、いわば新没落貴族ともいうべき人」と言われるごとく、須磨・明石の両巻に描かれた明石入道は、将来娘が都の貴顕と結ばれ、失なわれた一族の地位を回復してくれることを夢みている人物である。

とし、さらに

明石姫君と石山姫君は、生涯の閱歴や一族の楽才の伝承者としての造型など、極めて類似している。石山姫君の人物造型の先蹤としては、明石姫君をまず、第一に挙げるべきなのである。

と指摘している。坂本氏は、明石入道が現在は没落しているとはいえず、もとは大臣家の末裔であったこと、また、「入道」となつて物語を展開させることについて『夜の寢覚』の父入道への影響を指摘しておられる。しかし、明石入道が「受領階級」であったことそのものが、『夜の寢覚』では重要であったのではないだろうか。女君の苦悩の物語は但馬守三女として扱われることに始まることを考えれば、但馬守と受領であった明石入道との関係も考えねばなるまい。また『夜の寢覚』の但馬守も

③さるは、賤しき際にもあらず、上達部の族にて、しばしは公達まじらひもしけるを、うちつづきたる田舎のけに、かくなりにけるなるべし。(卷一 五二)

とあるように、もともとは「上達部の族」であったことが知られる。『夜の寢覚』の入道は、出家はしても、受領階級に落ちぶれることは決してないことを考えれば、但馬守の人物造型にも影響があるとみるべきだ。

『源氏物語』の中で「身の程」を憂い続けた受領の娘である明石の君に

『夜の寝覚』の女君が、自身の身分は決して低くはなかったにもかかわらず、第三部において諭えられることは注目し値する。なぜなら、女君は第三部において、自身の身分の低さを嘆き続けることになるからだ。

『夜の寝覚』における女君が身分差を苦慮するのは、中間欠巻部で男君の正妻となった女一宮に対する思いの中に縷々みられる。

④『「あまりわづらはしげなる世に、心置かれたてまつらじ」とおぼしたるにこそは」と、心得たまひて
(巻三 二二六)

巻三冒頭、女君の義娘の参内が決まり、女君は準備に忙しく、男君との関係も疎遠になった。男君との関係が疎遠であることに對して、女君は、男君の心情を「あまりわづらはしげなる世に、心置かれたてまつらじ」と女一宮への配慮を想像している。そして恨むこともなく義娘の参内の準備に邁進する。

女君は、男君が寄り付かなくなった理由を、女君自身や男君と女君の関係の中に見出すのではなく、男君と女一宮との関係の中に見出している。④の場面では、女君に身分に対する劣等感を確認できないが、女君が男君との関係を考えるとき、まず、女一宮のことを考えねばならない状況にあったことが、巻三の冒頭においてすでに提示されているのである。次の記事も確認してみよう。

⑤「なにし、やむごとなき基を見ながら、我はこよなき劣りざまにて、交しらむかたをこそ、すべてあるまじきことにも、あながちにもかかけ離れつつ、恨みらるれ。
(巻三 二七三)

女君は大皇宮の策略によって、帝に捕えられた時、男君との関係をふり返る。女一宮を「やむごとなき基」とし、女君自身のことを「こよなき劣りざま」と表現している。男君の妻として身分の高い女一宮よりはるかに劣った愛人として関係を持つことはよくないと、これまで男君を遠ざけてきた理由を思い返している。

「劣りざま」は正妻と愛人という立場の意味もあるだろうが、女一宮を「やむごとなき」と対比的に形容していることから、ここでは身分意識も読み取るべきである。

当該場面は第三部の大きい山場の一つである帝闖入事件中のこと、女君が男君への想いを自覚する場面としてこれまで指摘されてきた。女君は男君の恋情を受け入れられない理由として、女君自身よりはるかに身分の高い女一宮という正妻の存在を挙げ、劣等感を抱いていたことがわかる。

⑥「今となりて、はた、いとやんごとなく、さばかり恐ろしきさまに定まりたまひたるを、我はなにの頼もしげある身の際にてもあらで、今さらに靡き寄り
(巻三 二八九)

帝のもとから逃れ出て、義娘のいる登花殿に帰ると、女君はこれまでの自らの人生を内省する。まず、帝に捕えられたことが世間に伝えられた時の親兄弟の視線を恐れ、夫であった故闖白に申し訳なく思い、近親者の嘆きを思う。また、捕えられた時に、男君のことを意識したことを、疑問視する。男君との関係に対する嘆きとして、まず、「いとやんごとなく、さばかり恐ろしきさま」である正妻女一宮の存在を挙げ、それに対して、女君自身は「なにの頼もしげある身の際にてもあらで」と比較し、正妻の存在とともに、その「身の際」を意識している。

⑥は⑤の場面と同様に、女君自身によって、女一宮と対比され、女君の劣等感を強調する文章となっている。

⑤、⑥は宮下雅恵氏¹⁰⁾によって

「男主人公には既にしっかりと定まった、この上なく高貴な身分の妻がいる、それに対して自分の頼もしげなき身の際を思う、という記述が繰り返されていることが、「偽生霊」の発言を全肯定はしないまでも一部を保証する根拠となっていたことは疑えない。

と、生霊事件に結びつく人物関係として重視されている。帝闖入事件に関する女君の自己評価は生霊事件へとつながるものでもあったのだ。

以上、④から⑥は、卷三における女君自身による比較であり、身分差に対する劣等感の表れであったが、卷四の生霊事件を契機に、二人は男君によって比較されるようになる。第三章で検討したい。

三 男君による比較と女君の苦悩

⑦「いみじき帝の御女かしこしとても、『この人に絶えむよ』など」かけても聞くには、胸ふたがりて、ゆゆしう涙のこぼれぬべきを、念じて、またともかくもきこえたまはず。

(卷四 三八六)

生霊事件に際して、大皇宮は、女一宮の看病の合間を見つけては女君のもとへ通う男君を見咎め、女君のところへ決して通わないように言い渡す。男君は「いみじき帝の御女かしこしとても」と、女一宮を「かしこ」い存在であると認めた上で、女君との関係を断つことはできないと嘆く。しかし、男君は大皇宮に反論できず、ただ、「念じて」耐えるだけである。男君は直前に女君の生霊の存在について大皇宮に反論する場面も確認できることから、男君が口をつぐんでしまったのは、大皇宮の言いに男君も納得せざるを得ない部分があることをうかがわせる。また、女一宮の身分が高いことに対して女君の身分が比較的にしても低いことは男君も自覚的であり、女一宮側に対して、引け目に思っていることでもあったのだ。

次の記事では、より明確に男君によって女君と女一宮が対比されている。

⑧「世に苦しかるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ。いづれも、いと深くはあらず、なのめなるを、目やすくもてな

すこそ心の中はやすらかなりしか。こなたは、人の御程いとやんどなく、かたじけなきも、おろかならず、かれはた、年ごろ思ひまどひ、心を尽くししに、にはかに暇あるときの、いかでよろしからざらむ。さも苦しき心のうちかな」とうち嘆かれつつ、

(卷四 三九六)

男君は女一宮の看病をしながら女君に想いを馳せ、「二方に心分くる」ことの苦しさを嘆いている。正妻の女一宮は「やんごとなく、かたじけなき」相手であり、「おろか」にはできない。しかし、一方で女君は長年想いをかけた相手であり、ようやく会えるようになった人である。

女一宮に心を分けている理由としてのその身分の高さを挙げ、対比的に女君に対しては想いの深さを挙げている。この場面は、⑦の場面と同様に、男君によって女君と女一宮が比較される場面であり、身分の高い女一宮と、身分的には劣るが愛情の上ではより深い女君とを比較する。

ここで着目したいのは、「いづれも、いと深くはあらず」という表現である。かつて大君と女一宮の「心分」けた時は双方に対してそれほど深い気持ちを持っていなかったもので、今ほど苦しくなかったという。つまり、『新全集』頭注でも指摘されている通り、男君は身分の問題の他に「女一の宮をも純粹に愛している」のである。この男君の心情を女の立場から考えると、女一宮には身分という後ろ盾と男君の愛情があり、女君には男君の愛情しかないということになる。

女一宮降嫁に関しては、『源氏物語』若菜上下巻に描かれる女三宮降嫁の影響が指摘されるところであるが、紫の上の苦悩が深くなったといえ、光源氏の女三宮自身に対する評価は低く、「紫は、苦悩に堪えて光の期待に応え、光の紫理解を深め、病床に倒れても二人の愛を絶対化するに至った」という考え方も示されていることから、光源氏と『夜の寝覚』の男君の「心」の「分」け方は異なるといえる。

『夜の寢覚』の女君は愛情の上においても、女一宮と近似した基準で比較されるようになることよって、より強く自分の身分の低さを意識することになるのではないだろうか。

次の記事は男君が女君と女一宮を共に妻にしたことに対して罪悪感を抱く場面である。

⑨「…我が世にはた、内々こそつゆ分くるかたなくしみ返りたれど、たまさきり、やむごとなき人を並べて、様よきほどにもてなしたる、うち見るに、我にていみじく心苦しく、罪や得らむとおぼゆるに代へて、命はさりともし延びもすらむ」とおぼしやらるるぞ

(巻五 五二七)

女君の第三子出産に伴って各方面から産養の祝いがある。中宮から送られた祝いへの女君が詠んだ返歌の素晴らしさに感銘を受けた男君が、「命や、え長からざらむ」(巻五 五二七)と涙をこぼした後の男君の回想部分が⑨である。この不吉なまでの女君の美質について男君が思いをめぐらしている。

男君は、内心では「つゆ分くるかたなく」女君を愛し続けてきたが、外面的には「やむごとなき」女一宮を、「様よきほどにもてなし」てきたことに対して「心苦しく」思っている。しかし、⑧の場面で確認した通り、男君は女一宮を愛しているのである。「つゆ分くるかたなく」という思いは事実と異なっている。

⑨の場面の直前に、女君の美質を考えれば後の位についてもおかしくなく、当世一の権力者に愛されても大した問題にならないことが男君の心中で確認されている。これに対して、一貴族であり、しかも身分の高い正妻を持つ男君が実質的に「心」を「分」けている状態であることを「罪や得らむ」と男君が考えているのだ。

このように優れた女君を手に入れ、男君の「命はさりともし延びもすら

む」という思いでいるのだから、心の内だけでも「つゆ分くるかたなく」としなければ、申し訳が立たないという男君の心情なのであろう。

「やむごとなき」妻がいてもなお、女君を手に入れることができ、男君は「得意満足」^⑩なのであり、男君にとって女一宮を正妻としていことは確固たる事実であり、女君との関係を考える時の前提ですらある。男君はもはや女一宮を手放すことはできない。その証拠に次の⑩の場面では女君の産後、容体が落ち着き次第早々に女一宮のところへ通つていく。

⑩「人の御心はかばかりこそはあらめ。恨めしき節やは、つゆもまじる。やむごとなき片つかたの立ち並び、やすげなきは、我が身の契りの憂きがおこたりにこそあれ」など、日ごろ立ち去りせず扱はれるならひ、心細くつれづれなるに、

(巻五 五三〇～五三一)

女君の産後、女一宮の所に渡る際に、生まれてきた子への思いを男君が語る。女君がそのような男君に対して感謝の気持ちを抱く場面である。女君は今まで男君が「やむごとなき片つかた」である女一宮に心を分けていたことを苦しく思ってきたが、それも「我が身の契りの憂きがおこたりに」のためだったと反省する。当該場面は「夫をこよなく理解する、まさに「殿の上」の心といえる」^⑪と指摘されるところである。

女一宮の存在に対して男君を「恨めし」く思っていたことが確認でき、男君の接し方に感謝できる今となっても「やすげなき」気持ちであることも明確に記されている。ただ、責任の所在を男君から女君自身に引き受けただけのことである。『新全集』において「殿の上」の立場に安住するにいたったか」と指摘されるが、むしろ、男君に対して父親としての役割を求め、夫としての役割への希望を捨てたとも考えられる。

責任をわが身に引き受けたところで、「心細くつれづれ」であることは避けられない。

男君の第三子を出産してまもなく、男君が「やむごとなき方つかた」へ渡るのを「心細く」見守ることになる女君の姿に「やむごとなき」女一宮への「卑しい身分の女」としてのあきらめを見ることはできないだろうか。男君を見送った直後にそれぞれ身分が定まっている故関白の遺児たちがそろって見舞いに来た様子が描かれ、その様子を「頼もしげなり」（巻五 五三二）としていることから、女君は男君との関係におかれ、たときに「卑しい身分の女」として扱われ、その苦しみを味わうことになるものと考えられる。この「卑しい身分の女」としての女君の人物造型はあくまでも男君との関係性の中で、男君の視点によって作りあげられたものであったのだ。

以上、⑦から⑩の記事を挙げて、男君による女一宮との比較について検討してきた。

⑦～⑨は男君による、⑩は女君による比較であるが、生霊事件以後、女一宮に比べて「卑しい身分の女」として扱われ、「卑しい身分の女」としての苦しみを女君は受けてきたことになる。このようなイメージは本来ならば、但馬守三女としての誤解が解けた時点で、女君から払拭されなければならなかったが、女一宮と対比されることによって、少なくとも巻五の末尾までは女君は自らの身分の低さを嘆かなくてはならず、また男君も女君の身分の低さを意識せずにはいられなかった。

おわりに

第一章では但馬守三女と誤認されることによって女君に「卑しい身分の女」としてのイメージが付されたことを明らかにし、第二章では、女一宮との比較の中で「卑しい身分の女」と女君自身が劣等感を抱いていることを確認し、第三章では男君による比較により、女一宮と女君の比

較がより鮮やかに為されていることを指摘した。

このような身分意識は当人の間だけではなく、父入道や女一宮の母大皇宮によっても物語中で指摘されている。

その一方で、女君は作り上げられた「虚像」の中で苦しむことになるのだが、女君自身の身分に対する自負も決して低くはなかった。

⑪「をかしともあはれとも、見てはなににすべき。そは、かばかりになりぬる人の、ひとを、かく色を尽して、あまたかかる名を流す、よろしき人の上だに、さる類あらしかな」「さりきや」とも問ふべき類なき心地するに

（巻四 四〇八）

女君が生霊事件の噂を聞き、西山の移る準備をしている時、帝からの手紙をまさこ君が手渡す。帝の懸想がなければ、生霊事件も起こらなかったことを思い、女君はつらく思う。浮名を流すのは「よろしき人」の身の上にもないのに、女君ほどの身分にありながら、このような醜聞をさらすのはめつたにないこと、と嘆いている。女君が自らの身分に似つかわしい生き方をしたいという考えを抱いていたことは、次の記事からもうかがえる。

⑫「すこし物思ひ知られしより、『何事も人にすぐれて、心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思はれて、なにとなくをかしくてあらばや』と、身を立て思ひ上がりしに、世とともに、いみじともを思ひくだけ、あはつけうよからぬ名をのみ流して……」

（巻五 四三二～四三三）

女君が西山へ移り、自らの出家の意志を固める場面である。物ごころついた時から自らの生き方の理想を胸に生きてきたが、それとは裏腹な人生になってしまったことを嘆いている。

女君自身、自らの身分に対して、自負があり、さらにそれにふさわしい生き方を目指していたことは、自分の理想とは程遠い「虚像」に苦し

む大きな原因の一つでもあったと考えられる。

以上、検討してきたとおり、『夜の寢覚』は女君が「成長」する物語と指摘されているにも関わらず、一貫して変化しない女君像があり、それがまた、女君自身の本来の姿ではなく、誤解や周囲の視点によって形成されるものであることを指摘してきた。

『夜の寢覚』という物語は冒頭の誤認にはじまり、さまざまな誤解やすれちがいの中で展開されていくことを考えると、女君のこのような〈虚像〉が物語を展開させる原動力となっているとも考えられよう。

注

- ① 『日本古典文学大系 夜の寢覚』 岩波書店 一九六四年 解説
- ② 加藤史子氏「『無名草子』物語論批評の方法―「心上衆」を手がかりとして」『高野山大学国語国文』一四卷一九八七年二月
- ③ 鈴木一雄氏「紫の上と寢覚の上―成長する女主人公について―」『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』 小学館 一九九六年
- ④ 『夜の寢覚』の本文、頁はすべて『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』による。

- ⑤ 「撰関家嫡子の結婚と『夜の寢覚』の男君―但馬守三女への対応に関連して―」『国語国文』七三卷九号二〇〇四年九月
- ⑥ 『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』頭注
- ⑦ 『源氏物語』の本文、頁はすべて『新編日本古典文学全集 源氏物語』による。
- ⑧ 八島由香氏「人物ファイル」『わが宿世』への思い（上原作和氏編）『人物で読む源氏物語 明石の君』勉誠出版 二〇〇六年所収）の項目による。
- ⑨ 「音楽伝承譚の系譜―『源氏物語』明石一族から『夜の寢覚』へ―」『文学』五六卷一九八八年四月
- ⑩ 「病と孕み、隠蔽と疎外―〈女〉の身体と〈男〉のまなざしをめぐって―」『夜の寢覚論 〈奉仕〉する源氏物語』青蘭舎 二〇一一年
- ⑪ 望月郁子氏「女三宮の六条院入り―光・紫の上の対応と苦悩―」『二松学舎大学人文論叢』七〇号二〇〇三年三月
- ⑫ 『新全集』当該場面頭注
- ⑬ 『新全集』当該場面頭注

（本学大学院博士後期課程）